

令和5年度年報発刊にあたって

ここに、令和5年度に当研究所の各研究員が行った検査・監視・調査研究の成果等を取りまとめた京都府保健環境研究所年報第69号（2024年）をお届けいたします。

2024年をふり返ると、元日に能登半島地震が発生し、多大な被害と多くの方が被災されました。亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、少しでも早く復興されることを祈るばかりです。また、夏には記録的な集中豪雨が日本列島の各地に甚大な被害をもたらし、自然災害の恐ろしさをまざまざと感じさせた一年でした。一方で、2020年に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によるパンデミックは、5年間で実に11回にもおよぶ大流行を経てようやく落ち着きを見せたかと思いきや、12月に入りインフルエンザの流行とともに再び増加傾向にあります。さらに、マイコプラズマ肺炎、A群溶連菌感染症、手足口病、RSウイルス感染症、伝染性紅斑（りんご病）など、COVID-19に対する国民の感染予防への高い意識により封じ込められていた感染症が一気に増加し、様々な感染症が流行した一年でもありました。

自然災害も感染症も、平時からの危機管理対策が重要であることを我々は身をもって経験したはずなのですが、「喉元過ぎれば・・・」とこれまで体験してきたことですら日常の忙しさのなかで簡単に忘れ去られてしまうため、「天災は忘れた頃にやってくる」と緊張感を持って被害の最小化（減災）に向けた継続的な取組を行ってゆくことが大切です。

当研究所は、細菌・ウイルス課、理化学課、大気課、水質・環境課の4つの部門でそれぞれの専門的な業務を実施しております。病原体の全ゲノム解析や薬剤耐性菌の検査、残留農薬の測定や遺伝子組換え食品の監視、大気汚染監視や放射線常時監視、現在日本中で関心を集めている有機フッ素化合物（PFAS）の測定など幅広く、多くの検査や研究を実施し、地域や大学、国などの行政機関とも協同しながら府民が安心して暮らせる環境を守るために日々尽力しております。

第69巻目となった令和5年度の年報では、微生物分野から感染症発生動向調査とCOVID-19感受性調査に関する報告、食品化学分野から遺伝子組換え食品に関する研究および農作物中の残留農薬検査に関する研究、大気分野からコロナ禍の大気中窒素酸化物に関する研究、水質環境分野から閉鎖性海域の長期変動と水質中の農薬分析に関する研究の8編を掲載することができました。ご高覧いただき、忌憚のないご意見・ご批判をいただけると幸いです。

令和7年1月

京都府保健環境研究所 所長 藤田直久